

南アルプス市立小笠原小学校 第二回自己評価書

令和5年1月5日作成

校長： 飯久保 一男	記述者・職名： 志村 征俊・教頭
<p>学校教育目標</p> <p>校 訓「あかるく かしく たくましく」</p> <p>教育目標「自分を大切にし、他者を大切にする」子どもの育成</p> <p>具体目標 (1) 労をいとわず働く子 (2) 自分を明るく表現できる子 (3) 進んで学ぼうとする子 (4) 思いやりがあり、礼儀正しい子 (5) 健康でたくましい子</p>	
<p>本年度の学校経営理念と方針</p> <p>「喜んで登校し、満足して下校できる」明日が待たれる学校の創造</p> <p>①安全・安心な学校づくりの推進 ②教育の不易と流行の見定めと率先垂範による教育の推進 ③研究研修活動を活性化し、自ら学ぶ授業づくりの推進 ④楡形地区小中連携をとおして地域が一体となった教育の推進 ⑤学校評価システムによる学校経営の推進</p> <p>学校経営目標・具体的な取り組み</p> <p>真の「かっこよさ」を求める子ども</p> <p>①お互いを思いやる「かっこよさ」 学校教育目標「自分を大切にし、他者を大切にする」子どもの育成の意識化、共有化、日常化 小笠原流礼法の極意である「相手を大切に思う心」を「自然に表現できる」子どもの育成</p> <p>②お互いを高めあう「かっこよさ」 楽しくわかる授業と学力・教師力の向上 楽しい学校・学年・学級の創造</p> <p>③当たり前の「かっこよさ」 当たり前のことを積み重ねていくと、特別になる 基本的な生活習慣、学習習慣、行動習慣の定着 環境の整備</p>	
I 評価方法	
<p>児童、保護者、教職員の3者に対して、アンケート用紙により回答を得た。質問に対しての回答選択肢は基本的に4段階になっている。</p> <p>A：とても・よく～している B：だいたい～している C：あまり～していない D：～していない</p> <p>の4段階で、このうちAとBは肯定的なプラス評価であり、CとDは否定的なマイナス評価である。AとBのどちらを選ぶか、CとDのどちらを選ぶかについては、回答者の判断材料の有無・性格・回答時点の状況等が関係するため、A・B・C・Dを厳密に区別して集計することよりも、A・B合わせてのプラス傾向、C・D合わせてのマイナス傾向として集計する方が、全体的な傾向をつかみやすくなる。</p> <p>そこで、A・B・C・Dの選択肢を点数化し、A=4、B=3、C=2、D=1として集計し、回答者数で割って平均点数をもとめた。平均点数は次のような意味をもつ。</p> <p>○全体にプラス評価（A・B）が多ければ、平均点は2.5点以上になり、4点に近づいていく。</p>	

○全体にマイナス評価（C・D）が多ければ、平均点は2.5未満になり、1点に近づいていく。

なお、保護者、児童のアンケートには回答の選択肢として E:わからない があるが、これは点数には含めていない。

Ⅱ 全体評価

○教職員の自己評価、児童アンケート、保護者アンケートのそれぞれの集計結果を見ると、いずれも7月に実施した第1回学校評価と同様な傾向を示す評価であった。

（昨年度から学校評価の評価項目を見直し、回答方法も Google form を使って web 上で回答する形式に変更した。評価項目及び回答方法は楡形地区で概ね統一した。）

- ・教職員の自己評価の結果は、22の質問項目に対し、21の項目で評価の平均が3.0を上回る高い評価結果であった。
- ・児童アンケートの結果は、20の質問項目のうち、平均点数化できる16の項目中、15の項目で評価の平均が3.0以上のプラス評価だった。評価の平均が3.0を下回ったのは、「わたしは、授業中に自分の考えを伝えている」の1項目だけだった。
- ・保護者アンケートの結果は、全13の評価項目のうち、平均点数化できる8の項目すべてで評価の平均が3.0以上のプラス評価だった。

以上のことから、小笠原小学校では前期に引き続き、学校経営方針に基づいて教育目標の実現に向けて、一人一人の教職員が保護者の理解と協力のもと、それぞれの職務を遂行してきたことにより、教育活動全般にわたって適切な指導が行われ、そのことが児童や保護者に肯定的に評価されていると考えられる。従って、本校の学校評価に係る総合的な評価は概ね良好な水準にあると言える。

しかしながら、一つ一つの結果に目を向けてみると、マイナス評価の項目や、プラス評価ではあるがポイントが低い項目が各調査で見られる。教職員、児童、保護者のそれぞれの調査について、以下の「Ⅲ アンケートごとの評価」で考察し、課題を明らかにしていきたい。

Ⅲ アンケートごとの評価

教職員の自己評価アンケートについて

教職員の回答項目中には、平均ポイントが2.5を下回るマイナス評価の項目はなかったが、プラス評価の中でも評価の比較的低い項目（平均ポイントが3.0未満の項目）は次の1つだった。

17「あなたは、学校の教育活動について、おたよりやホームページを通して保護者や地域に広報していますか。」（保護者・地域との連携）
2.83→2.85（7月比+0.02）

また、7月の調査で評価の比較的低い項目だった以下の項目については、改善が見られた。

22「あなたは、働き方改革を意識して、積極的に業務改善に取り組んでいますか。」
2.83→3.09（7月比+0.26）

【考察・改善策】

前期の調査結果と同様に「あなたは、学校の教育活動について、おたよりやホームページを通して保護者や地域に広報していますか。」の項目が低い評価になっていることについては、前回の考察同様、学級担任が学年だよりや学級だよりなどで保護者に学校の様子を定期的に発信してはいるものの、ホームページの更新を学校長に任せてしまっていることが原因として考えられる。保護者アンケートの結果、「ホームページやおたよりから教育活動の様子を知ることができる」と回答している割合が、前回の96.1%から今回は94.2%と約2ポイント減少していることから、情報発信の必要性、保護者からのニーズが高まってきていると言っても良いだろう。新型コロナウイルス感染症の感染拡大に伴い様々な行事がこれまでの

ように実施できない状況を考えると、児童の健全育成のために、家庭や地域と共通認識を図る上で、学校生活の様子をこれまで以上に積極的に発信していくことは必要なことかもしれない。これからも、ホームページや学校・学年・学級だよりなどを用いて学校生活の様子を積極的に発信していくとともに、内容についても検討し、お知らせだけではなく、児童の様子を中心としたものとしていくことも考えていきたい。一方で、働き方改革のための業務改善策としては、職員の過剰な負担にならないような工夫も考えていかなければならない。

「あなたは、働き方改革を意識して、積極的に業務改善に取り組んでいますか。」の項目については、働き方改革について教職員がどの程度意識的に取り組んでいるかを見るために、今年度から新たに設けた項目である。前期の調査結果から0.26ポイントの改善が見られたが、依然として、日々の教材研究や成績処理、課題の添削、保護者への対応などといった業務以外に、様々な事務処理や各種研究会への参加、職員会議や校内研究に関わる資料の作成などの業務に追われ、なかなか時間外勤務時間が減らないのが現状である。また、「きずなの日」についても年間計画の中で位置づけてはいるが、会議等の調整のために確実に実施できている日数は目標数値よりも少ないのが現状である。今後も、これまでの業務内容及び業務体系を見直し、教職員の意識改革だけでなく、これまで以上に学校行事や諸会議の精選を行い、時間外勤務時間数だけの形式的な働き方改革ではなく、教職員の日々の生活や人生を豊かなものにするにより、人間性や創造性を高め、子どもたちに対して効果的な教育活動を行うことができるような本質的な働き方改革を行っていきたい。

児童アンケートについて

児童の回答項目中には、平均ポイントが2.5を下回るマイナス評価の項目はなかったが、プラス評価の中でも評価の比較的低い項目（平均ポイントが3.25未満の項目）は7月の調査よりも2項目増え、7項目となった。

1「わたしは、学校が楽しい。」(学校生活)	3.36→3.20 (7月比-0.16)
2「わたしは、学校のきまりを守っている。」(学校生活)	3.26→3.24 (7月比-0.02)
6「わたしは、無言清掃をしている。」(豊かな心)	3.18→3.16 (7月比-0.02)
8「わたしは、家の人に学校のようすを話している。」(豊かな心)	3.01→3.13 (7月比+0.12)
11「わたしは、授業中に自分の考えを伝えている。」(確かな学力)	3.01→2.84 (7月比-0.17)
13「わたしは、本を読んでいる。」(豊かな心)	3.10→3.05 (7月比-0.05)
15「わたしは、早寝早起きをしている。」(健やかな体)	3.01→3.03 (7月比+0.02)

【考察・改善策】

「わたしは、学校が楽しい。」の項目については、前回の調査から0.16ポイント減少した。長引くコロナ禍のため、学校生活を送る上で様々な制約があることも要因の一つと考えられる。しかし、新しい生活様式にも慣れ、制約がある中でも様々な工夫をして行事も行っている状況でこうした結果があらわれてきたことを重く受け止め、学習や児童会活動など学校生活のあらゆる場面で、児童が主体的に取り組み、達成感や自己肯定感を得られるよう改善策を講じていきたい。

「わたしは、家の人に学校のようすを話している。」や「わたしは、早寝早起きをしている。」の項目については、前回の調査を受け、学校の様子をホームページやおたよりでお知らせしたり、連絡帳や電話連絡で保護者との連絡を密にしたりする取り組みを継続してきた。そのことにより、家庭での会話が生まれたり、学校への理解にもつながったりするのではないかと考えた。また、児童の健康管理についても保健だよりや学年だよりなどを通して、家庭への呼びかけを行ってきた。今後も引き続き啓発活動に力を入れ、保護者の協力を得る中で、児童の健康管理にも取り組んでいきたい。

「わたしは、授業中に自分の考えを伝えている。」の項目については、前回同様、全項目中最も評価が低く、唯一2点台だった。前回の調査以降、クラスによっては1日1発言の取り組みを行うことで児童の発

表の機会を設けてきた。また、全校の取り組みとしては、意図的に対話的な学び（ペアや小集団での学び合い活動）を授業の中に取り入れたり、児童に関わりのスキルやコツを身に付けさせるために取り組んでいる「あやめっ子タイム」を継続的に実施したりしてきた。あやめっ子タイムの中で行っている Simple プログラムは一朝一夕に効果があらわれるものではなく、じわじわと効いてくるものであることが提唱者の曾山先生からも報告されている。その効果を期待して、今後も小中一貫教育の取り組みとして行っている「あやめっ子タイム」を中心に様々な取り組みを継続的に行っていきたい。

「わたしは、本を読んでいる。」については、朝読書の時間の確保だけでなく、授業時間を利用しての図書室の利用等、読書の機会を確保するとともに、図書日よりやおすすめの本の紹介、給食とのコラボや読み聞かせなど様々な取り組みが行われている。一方で、コロナ禍にあつて、休み時間の利用が高学年に限定されていることが本に触れる機会の減少につながっていることは事実である。今後も、これまでの取り組みを継続しつつ、児童が興味を持てるような工夫を取り入れながら本に触れる機会を増やしていくことで、「本が好きな子」を増やし、読書に親しむ態度を育てていけるのではないかと考える。

保護者アンケートについて

保護者のアンケート調査でも、7月同様、平均ポイントが2.5を下回るマイナス評価はなかった。7月の調査で取り上げた、プラス評価の中でも比較的評価ポイントの低かった3項目の今回の結果は次の通りである。

2「お子さんは、授業の内容が分かっていますか。」

3.08→3.14(7月比+0.06)

4「お子さんは、家庭学習(宿題や塾・家庭教師との勉強を含む)をしていますか。」

3.12→3.07(7月比-0.05)

9「学校は、保護者・地域住民からの声に耳を傾けていますか。」

3.10→3.11(7月比+0.01)

【考察・改善策】

この結果から、児童の学習に関する不安や悩みが依然あることが分かった。これは、新型コロナウイルス感染症のための出席停止で学習が受けられなかったことが要因の一つかもしれない。その対策として、chrome book を活用し家庭でもオンラインで授業を受けられる環境をつくったり、出席停止が明けてから放課後の時間を使って補修授業を行ったりしてきた。今後も「楽しくわかる授業と学力・教師力の向上」を目指し、一人一人が研鑽を積むとともに、校内研究を通して教職員も学び合い、楽しくわかる授業づくりに向けて、全教職員で取り組んでいきたい。さらに、各学級において、保護者との情報交換を密にし、児童の学習の様子について相互理解を図ることも大切である。新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、保護者に学校に来ていただく機会は少ないが、電話連絡や連絡帳を使って情報交換を行ったり、個別懇談等の機会を大切にしたりするなどして、保護者との連携に努めていきたい。

7月の調査以降も養護教諭・特別支援コーディネーターを中心にSC(スクールカウンセラー)や市の子ども家庭相談課、さまざまな相談機関や医療機関に繋いだり、連携して支援にあたったりしてきた。今後も関係機関と連携する中で保護者の悩みを軽くし、児童の健やかな発達につなげていきたい。

IV ま と め

アンケート調査の結果から、本校の教職員は学校長の示す学校経営理念と方針、学校経営目標を、日常の職務を遂行するための行動指針(具体的な目標)として意識し、日々の業務に使命感と責任を持って取り組んでいると考えられる。また、そうした教職員の姿勢が、児童が楽しく、充実した学校生活を送ることができることにつながっており、保護者からも一定の評価をいただいていると考えられる。

児童アンケート、保護者アンケートの結果を見ると、安定した学校運営がなされており、そのことが児童や保護者に評価されていると考えられる。しかしながら、児童アンケート、保護者アンケートの結果において評価の低かった項目は、いずれも、7月の調査から引き続き低い傾向が継続している。家庭学習の充実、早寝早起きなどの家庭での生活改善、困ったことを解決するためのピア・サポート体制の充実など、これらの項目は、昨年度までの学校評価からも、長い間課題となっている項目であることがわかる。これらの課題解決に向けては、啓発活動や様々な機関との連携などの継続した取り組みだけでなく、「学校の新しい生活様式」の中で職員の働き方改革も含めた新たな取り組み方法を模索していかなければならない時期に来ているのかもしれない。また、長引く新型コロナウイルス感染症の影響もあり、児童相互、及び児童と教師の関わりの希薄さが学校生活での児童の様子にも影響を与えている。様々な課題を抱えた児童が、新しい生活様式の中で安心して過ごし、学べる場としての学校の役割は今後さらに重要になってくると考えられる。

学校は本来「学びの場」であり、やはり1時間1時間の授業の充実が、よりよい学校づくりの基盤となっていくだろう。学校長が本年度のグランドデザインの中で示す「教師は授業で勝負するという気迫を持った教師力」を今後も更に伸ばしていくように一人一人が心がけていくとともに、「小笠原小学校全職員の英知を結集した学校力」を児童のよりよい成長のために発揮できるよう、保護者や地域住民の方々との連携を図りながら、協力して児童の教育を行っていきたい。